

### 「有益な対話の場の仕組みづくり支援から、次の災害へのノウハウ移転支援」事業

## 被災者支援に携わる団体が抱える課題解決のために ファシリテーターによる対話の場づくりを推進する

さまざまな分野・レベルで、東日本大震災の被災者支援が継続されている。しかし、震災から4年が経過し、改めて自分たちが何を大事にすべきか、何をやっていくべきかといった問題に思い悩んでいる団体も少なくない。ふくしま連携復興センターでは、そうした課題に応えるため、対話の場をデザインする役割を担ったファシリテーターの派遣に取り組んでいる。

### 支援に携わる多様なステークホルダーの 利害や意見をうまく調整する役割が必要

2011年7月に設立(同12月、一般社団法人化)された「ふくしま連携復興センター」(以下、ふくしま連復)は、福島県内で活動を続ける復興関連のNPO、任意団体、企業、大学研究所など約140団体(2015年3月現在)を会員に、①協働推進機能、②情報収集・発信機能、③研究・提言機能を事業の3本柱として、東日本大震災で被災した地域、および被災者自身の自立的な復興を目指し、さまざまな支援のコーディネートやネットワークづくりなど

の活動を展開している。

活動を続けるなかで、福島で支援活動を行っている人々や団体の間に、自分たちの活動について迷いや悩みが生じてきている状況が見られるという。ふくしま連復の山崎庸貴事務局長は、「震災直後は、目の前にある問題ととにかく片付けなければいけないということと必死にやってきたが、震災から3年、4年と経過したいま、様々なステークホルダーがいろいろな意見を言うなかで、組織のあり方や今後の活動についてとまどってきていることが背景にあるのだと思います」と話す。

そうした状況のなかで、ふくしま連復では、状況を解決する方法の一つとして、会員からの要請に基づいてファシリテーターを派遣することが有効ではないかという考えから、クオリティの高い専門的なファシリテーターを派遣することにした。

「実は、われわれふくしま連復が同じような問題を抱えるなかで、ファシリテーターを入れたワークショップを行ったことでうまくいきました。そのときに、これは有効な手法ではないかと思ひ至り、迷いや悩みを抱える会員の



ふくしま連復のスタッフに、ファシリテーターと合宿を行ったときの様子を語る「みんぷく」の赤池事務局長

みなさんにも活用していただくということで、今回のAJOSCへの助成申請事業に結びつきました」

### ファシリテーションの有効性を実証する モデルケースとなった被災者支援団体

ファシリテーター派遣の最初の事例となったのが、会員として一緒に活動を続けてきたNPO「3.11被災者を支援するいわき連絡協議会」だった(同団体は「みんなが復興の主演」という思いから、愛称を「みんぷく」としている)。みんぷくは、東日本大震災と東京電力福島第一原発事故の被災者を支援するために設立された団体で、商店等を利用した交流サロン「まざり〜な」の運営、情報誌「一歩一報」の発行、子ども支援、ボランティア受け入れ、体験学習「いわき防災・減災ツアー」の運営などを行っている。

「当初から支援活動が長期化することはわかっていました。そのなかで活動を継続していくために、改めて支援に携わる人々との間の目的や使命の明確化・共有化、財政基盤やスタッフの能力の強化の必要に迫られていました。そこで、ふくしま連復から派遣されたファシリテーターの方と一緒に、役員、事務局、連携団体の方々が1泊2日の合宿ワークショップを行いました。おかげさまで課題や問題を徹底的に洗い出し、基本方針や活動内容について再確認できました。『孤立する人を生まない地域づくり』という方針のもと、今後3年間の中期ビジョンといったものをまとめることもできました。それが後に、『生活拠点コミュニティ形成事業』という福島県からの委託



防災・減災に関する啓発事業として行われているみんぷくの防災講話

### 担当者より



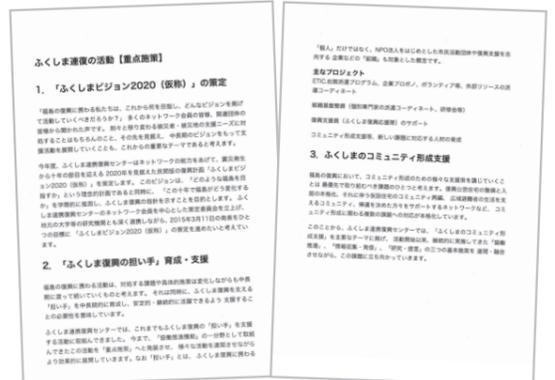
### 復興支援の思いで 立ち上がった団体を サポートしていきたい

ふくしま連携復興センター  
理事・事務局長  
山崎庸貴さん

AJOSCより助成をいただいたおかげで、復興支援の現場で課題にぶつかっている団体をサポートする一環としてファシリテーター派遣事業を開始することができました。そのモデルケースとして、今回はみんぷくと協働することができ、一層、連携を深めることができました。こうした成功事例を積み重ねることで、今後も支援団体のバックアップに努めていきたいと思ひます。

事業にもつながりました」そう話すのは、みんぷくの赤池孝行事務局長。

「我々と同じような悩みや課題を抱えているのではないかというシンパシーも、みんぷくにファシリテーターを派遣しようと思った一つの理由です。ファシリテーションのおかげで、みんぷくの結束、関連団体との関係強化に貢献できたのではないかと考えています。今後、いわき以外にも、被災者支援のモデルを作っていきたい」と、ふくしま連復の山崎さん。被災者支援のサポート役として、ファシリテーター派遣をメニューの一つにするだけでなく、今後は自前でもファシリテーターを育てていきたいと抱負を語った。



ふくしま連復の2015年の重点施策